

### <卒論>池波文学の母親の不在

野村, 恵子 / ノムラ, ケイコ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

99

(終了ページ / End Page)

108

(発行年 / Year)

1999-07-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020074>

## 池波文学の母親の不在

池波正太郎の作品を読み進むうちに、ある奇妙な事に気が付いた。それは「母親の不在」である。池波の作品全体を改めて見渡すと、まるでそれが約束ごとでもあるかの如く、母親というものが存在しない。主人公を始めとして作品の中心人物は、ことごとく「母のない子」なのである。

たとえば「その男」の杉虎之助の母・妙は、非常な難産の末に虎之助を産んで、間もなく息絶えてしまう。「おとこの秘図」の徳山権十郎の場合も同様に「母は権十郎を生むや、たちまちに亡くなってしまったのだ。」と簡単に片付けられている。「秘伝の声」の雪丸は、母どころか両親の顔も名前も知らぬ捨て子であった。対照的に「男振」の堀源太郎は、十五歳までは両親のもとに順風満帆な日々を送っていた。しかし毛髪が脱け落ちる奇病にかかり、それがもとで身の上に異変が生じるや、母親は重い病気にかかる。源太郎が母・みなの枕頭に駆けつけた時、みなはすでに息絶えていた。

これらの主人公はいずれも男性であるが、女性でも「乳房」

## 野村 恵子

のお松の母親も、まだお松が少女の頃に死んでしまっているし、「まんぞく まんぞく」の真琴にも母はいない。「真琴を産むと同時に、あの世へ旅出ってしまった」とされている。また「旅路」の三千代の母親などは「亡き母」と称されているだけで、詳しくは何も描かれていない。母親の不在の状況はどうかやら「男の子」に限ったことではないようである。

この状況は池波正太郎の三大連作とされる作品でも、例外ではない。「剣客商売」の秋山小兵衛の妻で、大治郎の母であるお貞もまた、大治郎わずか七歳にして世を去っている。後に彼の妻となる女武者・佐々木三冬も母がいらない。母・おひろは三冬を産んだ翌年に病死したことになる。

「仕掛人・藤枝梅安」の母親は、父親が病いで亡くなった翌日に、まだ少年の梅安を置いて間男と出奔した。殺しの相方・彦次郎はちようど逆の設定である。父の病死後、母は男を家に引き入れ、彦次郎をやっかい者あつかいする。たまりかねた彼の方が、十歳の夏ついに家を飛び出している。

「鬼平犯科帳」の「鬼平」こと長谷川平蔵も「母のない子」であったとされる。平蔵の母・園は彼を出産して二年目に世を去ったことになっている。平蔵の父親が本家を継ぐために、姪の波津と結婚したことで落胆し、急激に衰弱したとある。園は巢鴨村の大百姓の娘で、平蔵の父、宣雄とは身分違いの恋であった。

この様にどの作品を見ても母親は早逝し、出奔しと、早々に消されてしまう。これはいったいどういう意味を持つのであろうか。

ここで念のため作者池波正太郎自身の生い立ちを見ると、彼の母親はちゃんと存在していた。池波が没する四年前に八十四歳で亡くなっているが、彼が六十三歳まで共に暮らしていたのである。しかし実は池波の母親は一風かわった人物であったようだ。

池波正太郎は幼ない頃、両親の離婚により父と別れ、母方の祖父母の元で暮らすようになる。東京でも名の通った宮大工の棟梁の一人息子として生まれた父は、勤める店の倒産で初めて人生に躓く。以来酒に溺れ、暴力をふるう父に愛想をつかした母は、さっさと家を出てしまったという。その後母はすぐに再婚し、六歳の正太郎は実家に置きざりにされたのである。その時の心理を、池波は決して語ろうとはしない。しかし、幼い正太郎が、どんなにか母を求め、また逆に恨みに思ったかは想像できよう。それはちょうど梅安や彦次郎が父を失ない、母から棄てられた頃と符合する。

下町の職人の娘であった母は、鉄火で奔放な女性であった。

浅草永住町の実家に、ある日母は舞い戻る。満一歳の男の子を抱いていた。「それは、どこの子？」と問う正太郎に母は事もなげに答えたという。「お前の弟だよ」。正太郎の受けた衝撃は、いかばかりであったろう。それからというもの、一家を養うため殺気立って働いた母は、喜怒哀楽のうち「怒」のみしか現さなかった。だから正太郎は、母の愛情というものを実感することなく育っている。しかし「母は弟だけはかわいがった」と彼は言う。終生共に暮らしながら常に母の心は弟と共にあるに違いないと、懐疑の念を持ち続けた池波であった。彼は置きざりにされた時にいわば形として母と別れ、母が弟を連れ帰った時、真に決別を遂げたのではないだろうか。心の奥底では常に母を求めつつ、決して口には出さず、弟に注がれる母の愛情を見つめ続けた池波は、何重もの意味で「母のない子」に等しかった。

池波の母は、子供の為に夫に添い遂げるがまんをしなかった。別れた後も正太郎の為にと、一人身を通す決意もしなかった。再婚もむろん、彼に父親を与える為のものではない。そこには世の母にありがちな自己犠牲も献身も存在しない。がむしやらに働く一方で一人で鮎をつまむ楽しみを持ち、子供の教育には全く興味を示さず、小説や芝居・映画見物の為には小遣いを惜まない。正太郎の母はいわゆる常識や周囲の目などに縛られることのない実に奔放な人物であった。そんな母親にかわって正太郎を育ててくれたのは、小学校の教師達であり、下町の人々であった。その時代、東京の下町では隣近所が助け合い、互いの不足を補い合うことは自然なことであるという気風があった。そうした環境に生きていたからこそ母の細腕で一家を支えた。

ることができたのだと池波は語っている。母の代わりに彼が得た多くの庇護者達との出会いと関りは、以後彼の人生に、なくてはならないものであった。

「鬼平犯科帳」の「鬼平」こと長谷川平蔵は実在した人物である。この人物を世に知らしめたのは、他ならぬ池波正太郎であった。彼が初めて長谷川平蔵に興味を持つてから「鬼平犯科帳」の執筆までには、約十年間の時間がある。彼の胸の中に大切に暖められ、熟成を待つて、世に送り出された作品であった。そしてそれは初発から池波の死の直前まで、約二十三年間を作者と共に生きた作品である。それだけに彼の思い入れは、どの作品よりも強かった。「若き日の「鬼平」はなにやら私の若き日に似ている。」（「余裕ある時代の風俗」と語り、「私が「鬼平」を書いていることは、どうやら自分を書いていくことになるやも知れぬ。」（同）とも語っているように、池波自身の投影がひととき濃い作品なのである。だが、或いは、それゆえ、彼はこの長谷川平蔵の母親さえも、消してしまっている。

池波に対しては、ずい分意地の悪い立場から長谷川平蔵の生涯を書いたのは、瀧川政次郎氏であった。<sup>(注二)</sup>池波を「長谷川平蔵を大衆に知らしめた功労者」として、その功績を認めながらも、「経世家として、あるいは裁判官としての平蔵は伝えられていない。」と指摘する。そして自著執筆の意図を「平蔵の実伝を克明に調査研究して、彼が日本歴史の上に占める正しい地位を指し示すことこそ本書の眼目であり、使命とするところである」（傍点・野村）と明示している。池波には全く片腹痛いといったところであつたらう。だが事実は確かに、池波の創造により、史

実を離れて一人歩きを始めた「鬼平」は、改めて「正しい地位」を要求しなければならぬほどに、史実の「長谷川平蔵」を脅かしたヒーローであつたようだ。

ともかく瀧川氏が「眼目」といい、「使命」を自覚した歴史の「実伝」によれば、母親は非常な長生きで、長谷川平蔵の死後まで生存していたようである。瀧川氏は『寛政重修諸家譜』・『日本近世行刑史稿』と長谷川家代々の菩提寺・四谷戒行寺の「靈簿」の照合により、それを明らかにしている。

池波が時代小説を書くにあたり、入念な歴史資料の調査を怠らなかつたことは、周知の事実である。「鬼平犯科帳」を執筆するにあたって『寛政重修諸家譜』や、『武鑑』その他を繕っていたことを、彼自身が語っている。にもかかわらず「鬼平」の母・園は消されてしまった。池波が長谷川平蔵の実母の生存を知らなかつたとは考えられない。とすれば、そこにはどんな意図があつたのか。

明治近代文学の第一世代における抹消された父親達を論じられたのは勝又浩氏である。氏はそこで「父親＝家長」の消去を、新時代の新家長の創造のために必要なことであつたとされる。「親、特に父親のないことは、そんなふうにいるの時代でも、その男の自由の保証であり、また象徴であつた」と。父は常に権威権力として子の上に君臨し、制度に基づいて子の自由を縛りつけてきた。自ら子に規範を示し、子はその規範を身に付けて父の志を受け継いで行かねばならない。父権は「最も身近で最も強力な社会」（「明治文学と父の消去、父の復権」）なのである。それゆえに父からの開放が制度や規範からの開放であつたのだ

とすると、母からの開放とは何を意味するだろうか。母からの自由とは何を象徴し、何を保証するのであろうか。

子にとって母の存在とは如何なるものか。子は等しく母の腹から生まれる。母は生命の出発地点であり、子にとって唯一無二の安全地帯である。危険からの回避を、全て母の手に委ねていた子らも、やがて成長するにつれて自ら我が身を守る術を会得する。そしてその分だけ、母親から離れようとする。しかし母にとって子は、いつまでも「守るべき者」であり、その愛情はいつまでも呪詛のように子にまつわりついて離れようとしなない。母は一心に子の成長を願う一方で、子の巣立ちを拒み、阻み続けるものなのである。

成長して巣立ち、形式上は母親の元から離れる子も、母親の愛情の呪縛から解き放たれるのではない。それは物理的な距離とは無関係なものである。であるからこそ、いつまでも母は両手を拡げて子の帰りを待っている。子にとっては、いざとなる時いつでも帰れる安全地帯が母なのである。母を失った子は、初めから安全地帯を持たない。寄辺なく危険に身をさらさなければならぬ。しかしその代償に、母親の愛情の呪縛からは永遠に解き放たれるのである。

旧時代の規範と化している父親に寄り添って生きてきた母親にとって、子達に芽生えた新しい自我は危険以外の何物でもない。我が子を守るために母は子の前に立ちはだかるのである。それは制度や規範といった外界からの働きかけである父の場合よりも、もっと手強いものであったに違いない。母の愛情の呪縛と涙から放たれぬ限り、子達に真の自由の保証はあり得ない。

いつの時代も母親は、子の中に芽生えた新しい自我の芽を踏み潰し、自由への羽を無残にもぎ取ってきた。例えば円地文子の「女坂」の白川倫は、明治期の女性の典型的なタイプであった。その倫が男性支配社会の父権的なシステムに矛盾を感じ、そこから脱しようとした時、それを阻んだのはまさしく母であった。倫は理屈ではない母の愛情と涙にこそ負けたのである。母の考えを「古い倫理の残滓」といい得た彼女を、母が「情感」を武器に引き戻した「そこ」とは、古い倫理の家である。或いは樋口一葉の「十三夜」のお関にしても、父の諭しの後ろで「大泣きの雨」の母にこそ行く手を阻まれたのである。この様な例はいくらも見ることが出来る。池波作品は、そうした母をこそ消したのであった。

過去にただ一度だけ、池波は母親の愛情の呪縛から、子を解き放とうと試みたことがある。昭和三十三年七月『面白倶楽部』に発表された短編「母ふたり」がそれである。主人公りんの娘・邦子は、自ら身に付けた新しい時代の価値観で結婚を決める。古い価値観の母の元から、飛び立とうとするのである。だが、ここでも母は愛情の呪縛で娘を引き戻そうとしている。しかし「許さないと云っても、今の法律は親の権限が子供の結婚に強く響いては来ないように出来ているし、どうしても出ていくというものを引き止める術はない」と、母は、新しい時代の制度が娘に味方していることを知っている。形の上では子を引き戻すことはできない。だがその愛情の呪詛は、なおも子を捕え続けているのであった。作者は娘に、母を振り切って飛び立たせようと試みる。しかしその巣立ちには、あくまでも形の上だけのもの

でしかなかつた。邦子の「一寸、哀しげな、そして母親に対する愛情の溢れた眼ざし」は呪縛から解放されぬままに行く、切ない心の現れである。「じゃ母さんいずれ落ち着いたらお詫びに……」という娘は、明らかに罪悪感、古い親子の情に苛まれている。

一方で、「いつ、いかなる世にも〔自由〕は心象の中にしか存在しない。」「〔一瞬の平安〕」と言い切る池波である。行動の自由を手に入れても心象の自由を得ぬ限り、真の自由の保証はない。とすれば、彼はここで、娘に真の自由を与えることができなかったと言うしかない。だが、最後にりんが流した涙に、その可能性を見ることが出来る。母の涙は、娘への惜別ゆえでも、新しい法律に行く手を阻まれた悔しさでもない。自分自身が信じて生きてきた古い価値観、倫理が溶けかけて滲んだものである。そして、それを溶かしたものは他でもない娘が選んだ男の母親の生き様なのである。

その母親は、酒乱の夫に階段から突き飛ばされ、足を悪くしてもなお夫に仕えたような女であった。息子が十四歳の時に夫に死なれ、以後女手ひとつで育てあげた母である。その母が夫を語るところがある。

「でも悪い人じゃございませんでしたよ。ただ下町の大きな店の末っ子に育って甘やかされ放題に大きくなったんで、私と結婚しましてから勤めがうまくいかなくなり、そうなるも、もう苦い御飯の味を一度も知らない人だけに、酒に溺れて——だんだんに……」

この夫の姿が、あまりにも池波自身の父親に酷似しているこ

とに驚かされる。池波の母親は、そんな夫にさっさと見切りをつけて実家へ戻ったが、この母は去らなかつた。ここに池波少年の憧れにも似た母親像があると見てよいであろう。男の母の姿をりんとは対照的に描き、作者は肯定的な立場で見ている。障害も貧しさも決して卑屈に思わず「誰の胸にも沁み透らずにはおかないような美しい微笑」の人である。美しい微笑はそのまま心の中身であった。夫の弱さも包み込んで愛し、自己犠牲の献身で息子を育てた姿は、古いタイプの「母」そのままであるが、彼女はその自己犠牲の代償に子を縛りつけはしない。その姿にこそ、りんは心を揺さぶられたのである。この母親に池波は理想の母性を感じているようである。

「母性観念」というものの自体が社会的に作られたことであることを強調したのは、フェミニズムである。「良妻賢母」が外側からの規範なら、女性に「内在」するとされる「母性」への信仰は、近代的な「自我」の観念と真っ向から対立し、女に「無我」と「献身」を要求する。母に「母性信仰」から期待され、要求されるものが、自己犠牲であった。「女坂」の倫にせよ、「十三夜」のお関にせよ、芽生えた「自我」を踏みつぶしたものの正体は、母に「内在」すると信じられた「母性」であった。倫とお関は自分の母親の母性と、自らの母性と、二重に阻まれて自由を手になかなかつたことになる。しかしここで重要なことは、その「母性」とは、男性原理社会の制度が要求した、規範としての「母性」であったということだ。それは女性の本来身に具わった「母性愛」とは別ものである。男性社会が要求し崇めた母の美德、自己犠牲によって、自らの夢と人生を捨て

た女性は、その代償のように己の夢を全て子に託してきた。それが母親の愛情の中身である。

しかし池波は、ここではまだ、その二つの「母性」には思い至つてないようだ。「母ふたり」の男の母親は、表面上は自己犠牲の献身を伴う古いタイプの母に見えて、実は古い倫理に規制された「母性」に動かされたのではない。自らの「真の母性」を「自我」として選択し、生きたのである。それが証拠に彼女は愛情の呪詛で子をしばることをしなかつた。そのことに気付かなかつた作者は、子等の心象の自由を保証するために母親を子から引き離し、消して行くしかなかつたのではないだろうか。

仮りに池波の作品の中で、消された母を復活させたらどうだろうか。例えば「まんぞく まんぞく」の真琴は、母のみならず実父の顔も知らぬ身の上である。それ故に山崎金吾に懐いて、片時も傍から離れぬ程であつた。そんな山崎との関係であればこそ、山崎が討たれた時、敵討ちを決意し、剣術の修業に励む。そうして真琴には「堀の巴御前」とか「堀の女樊噲」との評判が立つようになる。「いまの世には、むしろ『あさはかな女だ』と、笑いものになりかねないのだ」と。娘のこんな生き方を、もし母がいたら許したであろうか。必らずや娘を自らの道徳で論じ、その時代の要請する女の生き方に引き戻したに違いない。

同じようなことは「剣客商売」の秋山大治郎や佐々木三冬についてでもいいえる。大治郎は父の道場の響動の中で育ち、十三歳の頃に剣士として生きる志を立てて父の元を離れている。大治郎のこの早い自立と志は、かりに母が健在だったら果たして成し得ただろうか。母は子に何よりも身の安全と生活の安定を願

うものである。この時代に剣の道を志すことは、その両方に反することである。母がいれば必らず何らかの抵抗なしにはすまなかつたであろう。佐々木三冬の場合はどうであつたろうか。妾腹とはいえ父・田沼意次は、老中である。たとえ田沼夫人の嫉妬が烈しくとも生母がいれば、常識的な習い事にも明け暮れていただろう。間違つても男に交つても引けを取らない「井関道場の四天王」になどならなかつたであろう。ましてや老中の娘が一介の剣士の妻になることなど母が許そうはずがない。そんな勝手ができたのは母の愛情の呪縛から自由であつたゆえであるだろう。

「鬼平犯科帳」の「鬼平」の活躍は、市井の人々との深い心の交流で培われた人間観があればこそである。そんな彼を作りあげたのは、本宅の父の元へ引き取られた後、継母の非常なじめにあつて家を飛び出したことに始まる経歴と経験によるものであつた。実の母がいれば、母を悲しませぬためにも耐え抜いて、おとなしい嫡男を演じたかも知れない。実在の平蔵は母がいてもぐれたというが、「鬼平」の比ではない。母の愛に恵まれぬが故に彼は、その心の隙間を市井の人々によって埋めたのであり、大名の嫡男たる者が自由に世間の風に当たることができたのである。「鬼平」が「鬼平」たる由縁は全て、母のない子としての経験がものをいうのである。

以上、見てきたように池波作品の「母のない子」に母を与えては、全く物語が成り立たない、或いはまるで違った物語になってしまうことが判る。彼らが自身の人生を自身で選ぶためには、「母の不在」は不可欠な要件であつた。

母のない子が母の不在によって何かを得るなら、子から放たれた母はどうであろうか。梅安や彦次郎の母親は、我が子よりも男を選んでいる。池波はそんな母を否定的に描き、非難さえ辞さない。しかし、だからといって「子を捨てた罪」の報いを理由に殺したりはしない。子から開放したままであるのは注目に値する。彼女達は少なくとも「母性」には規制されずに生きたことを認めるからであろう。

池波の作品にわずかに残された母の一人、「鬼平犯科帳」のおまさは「母性」に縛られずに生きた女性である。彼女は平蔵が火付盗賊改方に就任するや、自ら望んで名のり出て密偵になっている。自身も母のない子であった彼女は、実は今七つになる女の子の母である。平蔵はおまさの行く末を案じ、身を固める様に勧める。だが彼女は笑って受けつけようとしなない。亡父の郷里に預けている子を引き取り、面倒を見ようといつても承知しなかった。生活の安定も、母として生きる道も開かれていないにも拘らずである。「私の好きにさせて下さいまし」と言ったおまさは、結局「好きに」している。彼女が選んだのは、幼い頃より思慕の情を抱く平蔵のそばで、「引きこみ」の経験を生かしてキャリア・ウーマンとして生きる道であった。

「もう、男にはこりこりでございます」と笑った彼女であるが、その後二度再婚する。だがいづれの場合も娘を呼び寄せた気配はない。おまさを母親として限定せず「好きにさせて」いる作者は、母に「無我」と「献身」を要求しない。おまさは「好き」にしているのであって、「自己犠牲」で男たちに、子供たちに仕えているのではない。それが池波のスタイルである。

例えば山本周五郎なら「自己犠牲」自体を美德として、それを母に強いたうえ、陰に徹して生きることをも求めたであろう。母の陰の苦勞は、母亡き後に人の知るところとなる。そうして取り返しがつかぬという事が、一層美德の価値を高めるわけである。周五郎の描く母親達が陰の存在を強いられるのは、後のそうした効果を狙ったのことも知れない。『小説・日本婦道記』の「松の花」は、そんな方法がとられている。作者の生母の「陰徳」を主題にしたといわれる作品である。母親の「自己犠牲」の人生を知らされた子は、その呪縛に捕われ、母の倫理をなぞって歩んで行く。彼らが呪縛から解き放たれることはない。母は死をもって永遠に子を縛ったのである。それは母親の「自己犠牲」の人生の大きな代償に他ならなかった。

池波の描いた主人公達が母の呪縛から放たれた事実は、母の側から見れば、常識に規定された「母性」からの解放であるといえよう。母だけでなく池波が作品の中心に据える人物は、時代の道徳律にも、封建社会の制度にも縛られず、自らの価値観と意志で動いている。

しかし一方、母から放たれた子らは自由の保証との引替えに、唯一無二の安全地帯を喪失している。安全地帯を失った子は、我が身を寄せる場所を何処かに求めなければならない。主人公達の母親を抹殺してしまった作者は、その代償のように、必らず彼らに庇護者を持たせている。それらの庇護者なくしては彼らの行動も確立し得ず、その人生も成り立たないのである。

「その男」の虎之助は、「肺患病みの小鶉」と渾名される程に虚弱な青年であった。義母に疎まれ父からも見離された虎之助



は、将来を悲観して川に身を投げる。それを救ったのが池本茂兵衛であった。虎之助は池本が手塩に掛けた整体術によって別人の様に健康な若者に変貌を遂げる。池本は以後姿を消すが、虎之助が独り立ちするまで、ずっと陰から助言や資金援助を続けている。

「おとこの秘図」の権十郎には、母にも勝る程の愛情で世話をしてくれた千がいる。千のひたむきな育みで、生まれ落ちた時には見るからにひ弱な権十郎が、心貫流の剣の達人になれたのである。千の父で用人の柴田宗兵衛は、父からも見離された権十郎の身が立つように奔走した。同様に「秘伝の声」の雪丸を拾って育てた本郷庄左衛門がいる。雪丸が師と仰ぐ日影一念も、その一人である。また「男振」の堀源太郎は、原田小平太の力を借りて難局を乗り切っていく。命を狙われた彼を、老僕・儀助を初め権左衛門、伊橋弥平等が連携により守り抜く。大工の棟梁・伊助は、源太郎がやがて大工として生きて行く為に力を尽くした。人を殺して放心状態で放浪する「乳母」のお松を救ったのは、あほうがらすの長次郎であったし、倉ヶ野の旦那は安定した生活を与えてくれた。再び長次郎の元へ戻ったお松を細やかな心配りで世話してくれた隣家のお兼は、お松にとって祖母ともいえる存在である。それと同じように「旅路」の三千代には堀本伯道を初め源蔵、伊平衛、駒井宗理と、彼女の危急を救い、親身に面倒を見る人々が与えられている。「まんぞく まんぞく」の真琴も、山崎金吾や、金吾なき後には関口元道や御用聞き友治郎がいる。二人は真琴の志しである敵討を側面から援助するし、万右衛門や孫・千代の存在は肉親の愛情

薄い真琴の心の隙間を埋める。

この構図は三大連作も同様である。「剣客商売」の秋山大治郎にとつては、老師・辻平右衛門の慈愛があり、第二の師・嶋岡礼蔵の薫陶があった。二人なくして大治郎の成長はない。三冬には和泉屋吉右衛門夫妻・老僕の嘉助の支えがあったし、秋山小兵衛との出会いが、彼女の第二の人生を築いたのである。「仕掛人・藤枝梅安」では、梅安を拾って育てた鍼医師・津山悦堂がいなければ彼は存在し得ない。彦次郎にしても、家を飛び出した少年の彼を甲州屋作兵衛が世話をしている。「鬼平犯科帳」の平蔵は、我が家同様に迎えてくれる「盗人酒屋」があった。そこには忠助・おまさの父娘がいた。お袋的存在のお熊や彦十、また医師・井上立泉は生涯平蔵の活躍を助けているのである。池波が母のない子達に、母の代わりに与えた庇護者は、肉親と限られてはいない。彼らが自らの哲学を見つけ、人生を選択して歩き始めるまでには、実に様々な人々の力を借りている。そしてそこで彼らをつなぐものは、損得づくでも、義理でもない、ただひとつのもの「情」なのである。池波は人と人とのつながりにおいて、何よりも「情」を重んじた。

「鬼平犯科帳」の第三話には、池波の思いが吐露されている。「現代は人情蔑視の時代であるから、人間という生きものは情智ともにそなわってこそ「人」となるべきことを忘れかけている……。」と。平蔵の手足となつて働く密偵や部下達は、全て自らの情によつて動いている。密偵・糸八は、盗賊の子に生まれて孤児となつた赤子を平蔵が事もなげに養女としたことに感動する。それは平蔵への敬服と信頼の情へと育つてゆく。その情こ

それが糸八を突き動かすのである。この様に「情」が人を動かす、人を育てるといふのが池波の根本の思想であり、作品の中核である。彼は、「情」の前には「血」すら無視してしまふ。

「仕掛人・藤枝梅安」の「おんなごろし」で、梅安は実の妹を手にかける。自墮落で性悪な母親に生き写しの妹を、憎むゆえに殺すのである。彼はためらう様子を見せない。このことについて池波は語る。「それは、薄情かも知れないけど『親子兄弟より赤の他人』ということですよ。本当ですよ。たとえ自分の妹であろうとも、赤の他人を苦しめるのなら、ということですね。梅安自身が、赤の他人によって今日を得ている男ですから……」〔対談・藤枝梅安の十年〕。「赤の他人によって今日を得ている」のは梅安ばかりではない。彼の作品の主人公達は皆、この言葉が当てはまるのである。そしてそれは、作者・池波正太郎その人のものなのである。どうやら彼の前には「血は水よりも濃い」という諺は通用しないようである。人と人をつなぐ、一番堅い絆として「情」を重んじた彼の思想は全作品に溢れている。血の裏うちもなく、利害も義理も絡まぬ「情」と「情」の融合により子は育まれる。それが池波の「情」の思想である。母から放たれた子は、池波自身がそうであったように、社会の子として世間の人々の「情」の連携によって成長するのだ。

「アガペー」とも「愛」とも違う「情」は、日本人特有のものであったと思われる。それは言葉に尽くせぬ、目に見えぬ心の機微として、日本人の魂の奥底で共感し合えるものであったはずである。池波の言う「あらためて筆舌にのぼせるまでもない」ものであり、「生き生きと、しかもさりげなく実践されてい

た」〔血頭の丹兵衛〕ものなのである。池波の少年時代、まだ江戸の気風を色濃く残していた。東京の下町で、彼自身が体験した「情」の交流を、彼は主人公達に体現させたのであった。

「情」はそれを掛ける側の思いであって、決して見返りや代償を望まぬ純粹性がなければならなかった。あくまでも押しつけがましきのない「さりげない」行動で表現されるのが池波の方法である。「母ふたり」のりんの涙のように、「涙」や「瞳の色」や表情によってのみ表され、決して説明はなされない。同じ「情」を扱いながら、全てを言葉で説明してしまう山本周五郎とは対照的である。池波は「人の心などというものは、言葉にして口ののぼせてしまうと、却って真実がたわらぬ」〔乳房〕と考えていたからである。逆に言うなら言葉には尽くせぬ深さが、彼の「情」には秘められていた。そして相手の「さりげない行動」に込められたそれを、過たずに受け止められることを、人となる要件と考えていた。

池波は「情」によって人を動かすが「情」は人を縛りつけない。それは彼の反骨精神の現れでもあった。なぜなら、彼自身が納得のいかないことを強いられるのを極端に嫌がったからである。池波のそんな一面を随筆の中に二度、見ることができ。一度目はまだ少年の頃、株屋で「チツカー係」にまわされた時である。機械から出てくる数字を、たった一人で空間に向かつて叫ぶことに「どうにもバカバカしい。不自然きわまる」と判断を下した彼は、いくら叱られても上司の意に従わず、店をやめさせられている。彼はその時の事を語る中で「こうしてむりやり強要され、圧力をかけられると私は相手のおもうまま

にならなくなってしまう。これはむかしもいまもそうなのだ」  
〔テレビの顔(上)〕と自分を語っている。

二度目は青年時代、戦争中の三浦半島・武山海兵団内でのことである。上官の卑劣なやり方に腹を立てた池波は、ここでも上官の指示に従わず、ひどい制裁を加えられている。殴られ蹴とばされて、顔が「西瓜の化け物」のようになっても頑として動かなかつた。その時彼は「和島中尉」という庇護者によって窮地を救われている。

池波は作品の中から母を取り去ることにより子等に人と人との「情」の交流を成立させた。池波は母にすら「母であること」を強くない。同様に女にも「女であること」を強制しない。どんな人間も裸のレベルで同等に扱い、何よりも「自我」と「自由」を尊重し続ける。肉親間の愛情には「あってあたりまえ」という固定観念があり、なければ逆に非難される。愛は常に見返りを求め、束縛を伴う。でなければ自己犠牲を強いられる。「発するも自由」、「受け取るも自由」、決して規制も束縛もされないもの、それが「情」である。なぜなら時代の道徳にも捕らわれず、権威にも束縛されず、身分や地位や名誉といった人間に付随する様々なものを脱ぎ捨て、素裸の人間同志が同じレベルで向かい合うところに「情」は成立するからである。

池波文学の「母親の不在」には、「血」よりも「情」を、「体制」よりも「人間」を重んじた池波式ヒューマニズムと自由の思想が秘められていた。

注一、瀧川政治郎「長谷川平蔵・その生涯と人足寄場」(一九九四年六月、中央公論社) (のむら けいこ・一九九九年卒)

#### 第六十一号 寄稿要項

次号(第六十一号)は 特集「現代」といたします。  
しかしこれは、必ずしも現代文学研究のみを意味するものではありません。古代・中世・近世・近代の、それぞれの専攻分野の論文において「現代」との関連を追求していただきたいわけです。そもそも「現代」とは何か。この考究の論文および随想のご寄稿もお待ちいたします。

枚数…論文三十枚、随想六枚。(四百字詰)

メ切…十二月十七日(金)

#### フロッピー入稿の場合

- ①MS-DOSのテキストファイルの状態にするにと。
- ②フロッピーとともにプリントアウトした原稿を二部添えること。